

「きこえとことばの教室」における

LDおよび周辺児の保護者への援助

—障害の発見から告知・理解・受容・適応の過程を共に歩む—

田中 容子 浅見 智恵子 草野 久美栄 森部 京子
森本 初江 佐貫 勢津子 田中 敏子
(東京都三鷹市立南浦小学校 きこえとことばの教室)

<要 旨>

「きこえとことばの教室」(難聴言語障害通級指導学級)に相談に来る児童の中で、LDやADHDだけでなく、軽度の知的障害やPDD等の軽度発達障害を併せ持つ児童が多くなっている。事例を通して検討を試みたところ、児童の行動面の問題が大きく表面化しないために、小学校入学後に担任によって発見されるまで、保護者自身もはっきりと気付かないことが多く、問題を告知されても理解するのに時間がかかることもわかった。しかし、中学年以降の通級開始でも、確実なアセスメントから作られたIEPのもとで、児童の自己認知の力を向上させ、主体的に進路を考えさせることができ、保護者の理解も進めることができた。また、保護者同士の連携の場を作るべく、保護者向けの「子どもの発達勉強会」を立ち上げたところ、5回で20家族、のべ73人が集まった。その中で、基本的な発達に関する知識や、LD、ADHD、PDD等の軽度発達障害児に対する家庭での望ましい接し方や兄弟関係の問題、大人の価値観を転換させることの困難さ等、幅広く話し合うことができた。

<キーワード>

難聴言語障害通級指導学級、軽度発達障害、問題の告知、自己認知の向上、保護者同士の連携

【はじめに】

「きこえとことばの教室」(難聴言語障害通級指導学級)は、もともと聴覚障害や言語・コミュニケーションの問題を持つ児童のために作られた学級である。特に「ことばの教室」(言語障害学級)は構音障害や吃音等、言語表出面の課題を持つ児童のために開設された。しかし、最近では、言語の理解や概念化の問題、読み書きの問題を通常の学級担任が発見し、「きこえとことばの教室」に送ってくるが多くなっている。それらの児童の中にはLDやADHDだけではなく、軽度の知的障害、または広汎性発

達障害等を持つ児童も含まれている。

このうち、特に小学校入学後に担任によって発見される者は、行動面の問題が大きく表面化しないタイプの児童が多いため、保護者が児童の課題を理解し、認めるまでにはたいへん時間がかかる。われわれは、本来の「きこえとことばの教室」対象児ではない相談ケースであっても、これらの児童に学校教育の中で柔軟に対応していきたいと考えた。そこで、保護者に児童の問題を告知し、理解・受容・適応を導くためにどのようなアプローチが必要であるのか、また、

通常の学級担任との橋渡しをしたり、進路について考えたりすることができるのか、その際の通級指導学級の役割とは何か、について研究したいと考えた。

【方法】

1. 一事例を取り上げ、アセスメント、通級指導学級・通常学級・家庭における IEP の立案、実施、評価の過程を分析するとともに、両親との面接経過を検討する。

2. 「きこえとことばの教室」に通級する児童の保護者に対して、発達の課題について共に勉強する会を立ち上げ、その内容に対する保護者の受け止め方を毎回のアンケートや話し合われた結果をもとに分析する。

【結果】

1. 事例：A（男・校内通級・6年）

＜相談の経緯＞小学校1年より「校内学習障害児等巡回相談（担任が気になる子の相談）」で挙がっていたが、4年3学期になって、担任の勧めで「きこえとことばの教室」へ相談。

＜主訴＞指示語が多く、何を言っているかわからない。相手にわかってもらうような話し方をしない。一つのことを覚えるのに時間がかかる。授業に取り組まない。

＜家族＞父・母・本児・妹（4年）・妹（保育園年長）の5人家族。

＜生育歴＞3350g・吸引分娩・チアノーゼ。定額・始歩等問題ないが手先が不器用。3歳で衣服の着脱ができない。

始語2歳頃・一語文3歳。言語発達が遅い。泣かない手のかからない子で、ボーっとしていることが多かった。目が合いよく笑うが、人見知りは少なかった。保育園では一人遊びが多かった。多動で困ることはなかったが、注意散漫。

興味のないことには落ち着いて取り組まない。

＜学習面＞

聞く：集中して聞いた事理解はよくできる。しかし、話題によっては1対1でも最後まで聞いてもらえないことが多い。

話す：話題が逸れ、一方的に話すことが多い。本児の語りを担当が構成メモにすると、それを見ながら人前で順序よく話せる。

読む：読み誤り多いが、学年レベルの漢字で読めるものもある。恐竜の本が好きで、一人で読む。ハリーポッターも読める。

書く：筆圧が弱く、平仮名でも形を取れなかったり思い出せなかったりするものがある。低学年の頃から視写ができない。濁点の省略や拗音、促音の誤りがある。作文は書かない。

計算：四則計算は掛け算まではOK。九九を覚えるのがたいへんで時々誤る。わり算は何回やってもやり方を忘れてしまう。

推論：量の概念や測定は時間がかかるができる。自分で順序よく思考することが困難だが、テーマは何か、いつどこで（どこまで）誰がどうする、を援助すると考えられる。

＜行動面＞

注意集中：目についたこと聞こえたこと頭に浮かんだことに気をとられ、集中できない。

1対1では集中は比較的良好。

集団参加：小集団でも集中できずに手遊びや離席が多い。在籍学級では学習・生活面ともに意欲がなく、手遊びが多い。

対人関係：特定の友達はあるが、学級の仲間とはあまり交わらない。自分の意に沿わない状況では涙ぐむことがある。時には頑として周囲の意見を取り入れない。

興味・関心：ゲーム等は学年相応。小動物が好

きで、飼育委員会の仕事をよくやる。歴史物語が好きで、登場人物や物語を覚えている。

<運動面>

粗大運動：苦手。やっと自転車に乗れるようになったが、転んで手が出ず顔面をこする。鉄棒で支柱に顔をぶつける等、思わぬ怪我する。走るのも遅い。

微細運動：不器用。利き手は右。左右の手の交互運動－。目と手の協応－。紙工作は好き。

<生活面>

身辺処理：いつもシャツが出ている。整理整頓が苦手。忘れ物が多い。

時間や金銭感覚：通級日時はよく覚えている。金銭はいつも家族に管理してもらっている。

<検査結果>

WISC-III CA10-0

VIQ101、PIQ89、FIQ95

VC103、PO98、FD79、PS66

K-ABC CA10-3

継次処理82 同時処理94

認知処理87 習得度85

読書力検査 実施学年4年3学期

読書学年3年3学期

<本児の見立てと対応の方針>

著しい多動ではないが、常に体の一部が動いており、注意集中が悪い。読みは1学年程度の遅れだが、書字は本児の全体的な能力に比べると著しく困難である。また、同学年の友達と対等に関わることが困難で、他者への興味も乏しい傾向があると考えられた。そこで、「きこえとことばの教室」へ入級させ、5年から6年卒業まで週3回・5時間の通級指導（個別および小集団）を行った。

通級指導の内容は①自己認知の力を高める。

②比較的良好な読みの力を伸ばし、通常の学級での意欲を高める。③学校学級の行事に対して見通しを持って行動できるようにする等。

また、保護者と定期的な面談を通じて本児の持つ課題について知らせ、理解をはかるとともに、家庭での対応についても話し合いの中でさまざまな工夫を考えていくことにした。

<児童の変容>入級当初(5年初め)は自分の行動を振り返ることができなかったが、6年後半には自分の得意・不得意について言語化することができるようになった。また、通級指導の中のスモールステップで原稿用紙一枚程度の作文が書けるようになり、それとともに、通常学級の授業への参加意欲が高まった。中学進学に向けても心身障害学級を見学し、主体的に自分の意見を述べることができた。

<両親面談の経過>幼少時から「他の子と何かが違う」と薄々感じていたが、わが子が個別的な支援の対象であるとは考えてもいなかった。しかし、ほぼ月に一回の面談と、後に記述する「子どもの発達勉強会」に参加する中で、本児への対応だけでなく、幅広い発達の中で今の状態をどう捉えるか、ということを考えられるようになった。

当初は本児の学習の問題から相談につながってきたが、次第に本質的な問題は学習の問題ではないことを理解し始めた。その結果、家では手伝いのさせ方を本児の認知の特徴に合わせる等の工夫をするようになった。

望ましい対応と、頭でわかっている気持ちは揺れて冷静に対処することは困難な時もあったが、通常の学級担任との三者面談や中学校心身障害学級見学等を通じて調整してきた。

2. 「子どもの発達勉強会」立ち上げと経過

ある保護者から、「きこえとことばの教室では発音やことばを育てるには、というテーマの保護者学習会はあるが、子どもの問題の背景にあるLD等について、他の保護者の方と話し合ったことがない。自分一人の子どもの問題であるのか不安になる。」との訴えがあり、それに応えるべく、立ち上げることとなった。本来なら保護者会として開きたいと考えたが、父親の集まる土曜日に開催すると、担任の休日出勤等の事務手続きが困難であるので、校長が認めた有志の会、ということでスタートすることとなった。

平成14年度内に5回の勉強会を実施し、①発達の課題についての基本的な捉え方、②LDの心理的疑似体験、③先輩保護者の話、④進路、⑤LD・ADHD・PDD児への家庭指導について学習会を行い、20家族、のべ73人が集まった。アンケートからは、困難さを抱えているのは自分の子だけではなかったと思えてよかった、子どもの問題そのものは治らないということがわかり愕然とするが腹を据えて対処しようと思う、進路については厳しい現実があると感じた、子どもの個性を理解しようとしても周囲と同じ学習や行動が求められ厳しい、等の感想が寄せられた。また、図書を購入し、保護者が自由に閲覧し、発達障害やその支援、就労についての個人的な学習も行えるようにしたところ、児童の指導時間に保護者同士がそれらの図書を囲んで、自主的に話し合う様子が見られた。

なお、年度末のアンケート結果からは、就学後、担任からの指摘によって、子どもの発達の課題に気付いた家族が圧倒的に多く、就学前に気付いていてもそのうち成長するだろうと考

え、専門機関への相談をしないまま入学したケースがほとんどだった。

子どもの発達勉強会アンケート 事例保護者の回答より

1. お子さんの課題に気づいたのはいつ頃ですか？どのような状態に気づきましたか。

<回答>入学後1年3学期頃、母が気づいた。

2. お子さんの課題に気づいた時のことをお聞かせ下さい。

・お子さんに対して、または自分自身に対してどのように思われましたか。

<回答>勉強の遅れが目立つようになり、親としては子どもが、問題の何がわからないから理解できないのかがわからず、途方に暮れた。

・誰に相談しましたか。

<回答>誰に相談したらよいのかわからなかった。2年生の時の学級担任の先生は「特に問題視していない」とのことだった。「きこえとことばの教室」がこのような子に対応しているとは知らなかった。

・お子さん自身とそのことについて、または学校や生活で困っていること等について、話し合いましたか？

<回答> はい

・その理由や話した内容をお聞かせ下さい。

<回答>勉強の遅れについてどうする？と聞くと、「やる」と言うので、公文の塾へ入れた。それほど嫌がらずに行った。結果的にはほとんど効果がなかった。

3. きこえとことばの教室への教育相談はどのように決めましたか。

<回答>4年の担任に勧められて

・通級学級以外の機関に相談しようと思いましたか。

<回答>いいえ

・通級学級に相談した理由は何ですか。

<回答>勉強ができないから。

・他の人に勧められた場合、その人についてどのように思われましたか。

<回答>母は以前から、勉強があまりにできない理由は本人がなまけもののためか、または他に原因があるのかとと思っていたし、もし他の原因ならそれは何なのかとと思っていたので、他の人から指摘されて、私だけがおか

しいと思っているわけじゃないと、かえって安心した。

4. 相談の結果、入級を勧められた時、どう思われましたか。

・きこえとことばの担当者に対して

<回答>よろしくお願いします、という気持ち。

・自分自身に対して

<回答>これで何とかみんなに追いついていけるかな、と思った。

・お子さんに対して

<回答>よかったと思った。

5. きこえとことばの教室では保護者の方、在籍学級担任の先生との連携の中で、指導計画を立て、学習を行おうと考えています。このことについて、お答え下さい。

・きこえとことばの指導について、その内容、回数等につき、どのようにお考えですか。

<回答>良かった。

・保護者の方がお子さんの状態をより理解していただけるよう、行動観察や検査の結果についてお話ししているつもりですが、そのことについて、どのようにお考えですか。

<回答>良かったけれど、ピンとこなかった部分もあった。

・在籍学級担任の先生との連携について、どのようにお考えですか。

<回答>良かった。

・これからの通級指導に対して望まれることをお聞かせ下さい。

<回答>援助を必要とする子どもに対し、通常学級の担任の対応が十分に行われることを望みます。(通常学級の担任の力量と通級や障害についての理解度の差が大きいため、運に左右されているような気持ちになります。

6. 発達勉強会について、お答え下さい。

・昨年は次のような勉強会を行いました。出席された回で印象に残ったこと、お感じになったことを書いてください。

① 子どもの発達について

②アンバランスの疑似体験、

③親の会の話

講師：LD児親の会会長 藤本氏

<回答>車の免許の話など、そこまで手をかけるといけないのかと思い、この障害がそれほど大変なものなのか、と改めて思った。

④進路を考える

講師：通級中学

(元養護学校) 渡辺先生

<回答>障害の度合いが中途半端なので、一番、就職には困る、ということがわかった。

⑤LD.ADHD.PDDの特徴と対応

講師：ながまやメンタルクリニック

水野先生

<回答>自分の子どもの状態を客観的に見ることができた。

・これからの勉強会に望むことをお聞かせ下さい。

<回答>しょうがないのかもしれないけれど、自分の子どもに当てはまる例があまりないので、似ている例について聞きたい。

【考察】

1. 事例を通して考えられたこと

<児童について>

高学年の2年間という短期の通級であったが、本児なりの自己認知ができ、進路選択ができたと考える。これには、保護者、通常学級担任ときこえとことばの教室担任が、常に連絡を取り合い、本児の課題を共通に理解・認識し、一貫性を持って本児に接したことも効果を及ぼしたのではないか。

<保護者について>

(1) 発見から通級に到る経過の中で

本児は言語発達の遅れをはじめとして、生育歴を丁寧に探っていけば、軽度発達障害のリスクをたくさん持っていた。しかし、就学前まではそのことに両親はまったく気付かず、保育園でも「個性的な子」とされて、過ごして来たようだ。本児の課題への気付きは、アンケートにもあるように、学習面で母親が心配を始めたのがきっかけであった。しかし、このことを学校の担任に訴えても、2年生の頃は「特に問題視していない」と言われ、個別相談を行うには到らなかった。だが、担任たちは1年生以降、す

すべての学年を通じて、学校内の「担任が気になる子の巡回相談」として行われた「LD等巡回相談」の中で、本児を挙げており、カンファレンスでも、毎年「早急に個別対応が必要であるので、担任がそのことを勧める面談を行って欲しい」と言われてきたのである。両親も担任も、本児に対して何らかの疑問や手立ての必要性を感じてはいたようだが、それを実現させるためのコミュニケーションがうまくいかなかったと思われる。また、中学年は担任がすぐに産休に入ってしまう、コミュニケーションが深められなかったことも残念であった。しかし、本児の課題を認識し、自分が責任ある期間の内に相談を実現しようと行動してくれた産休代替の担任の努力で、相談が実現することになった。

さらに、「きこえとことばの教室がこのような子へ対応する学級であるとは思わなかった」と保護者がアンケートに答えていることから、本来の対象児ではない子へも相談として対応していることを、担任がもっと具体的に保護者に話すことができるよう、連携を深めていかなければいけなかったと考える。

(2) 面談と勉強会の経過から

担任とのコミュニケーションでは今一つうまくいかなかったが、実際の通級指導の過程では、面談と発達勉強会を通じて価値観の転換や、児童の特性を受け入れることについて迫ることができた。

① 障害の告知について

本児については、入級を勧めるにあたって、担任の情報からLDやADHDないしは軽度の知的障害も含めた軽度発達障害が十分予測されたので、保護者については「きこえとことばの教室」が障害児学級であること、授業時間

を抜けての通級が必要であること等を、最初から保護者に伝えた。

保護者は動揺を隠せないようだったが、特に母親が本児の学習の問題はなぜ解決しないのか、疑問に感じていたため、一時期感情的になったことはあったが、冷静に判断することはできたようだ。父親は今まで本児に学習を無理に教えようとしてきたこと等を悔やむ発言があり、事実を受け入れるまでに時間がかかったが、夫婦一緒、または別々の面談をきこえとことばの教室担当者と繰り返すことによって、徐々に気持ちを収めていった。

② 障害の理解について

当初は学習の問題に着目しての通級開始であった。しかし、面談を進めるにつれて、本児の行動面、対人関係の問題にも保護者が着目し始めることができた。これは、家庭での兄妹関係について保護者が悩んでいたことや、きこえとことばの担当者が現在の本児の問題点を将来の就労を考えた時の問題点と具体的ににつなげて説明したこと等から、より具体的に保護者が捉えるようになったためと考える。

また、本児の通級の場合や、通級担任が通常学級に出向いて本児を観察し、通常学級担任からも細かく聞き取りを行った結果、行動観察やアセスメントからの本児の実態把握が経過とともに確かなものになっていった。それらの事実をもとに面談を繰り返したところ、科学的な根拠に基づく見立てを保護者が理解することとなったと考えられる。

③ 障害の受容について

頭の中で理解したことを、ある程度の疑問を感じながら、情緒的にも受け入れられるようになることを「受容した」とすると、この過程は

たいへん難しい。このケースの保護者も同様であった。本児を無理やり座らせての家庭学習は無理、とわかっていても、つい「このままではしょうがない」という思いから繰り返してしまったり、家事の手伝いも一度に二つ以上の指示は無理、とわかっていても妹たちはわかるのに、と思ったりの繰り返しであった。この点では卒業した現在でも「受容」の過程を歩んでいると思うが、本児の状態を「なまけ」ではなく、「個性」や「素質」として感じるようになってきたと思う。ここに到るには、何度も生活の中で本児の行動を確認し、面談や勉強会の中で言語化する繰り返しが必要であったと考える。

進路を決定する面談の中で両親が、「この子のゴールは20歳ではない。人より長くかかっても、自分で考え行動できるようになるよう見ていこうと思う」と語れるようになってきたことは、受容の第一歩であると考えられる。

④ 適応について

理解から受容に到った事柄を、生活の中で自然に実行できるようになることを「適応」と呼びたい。このことはさらに困難な事柄であり、行きつ戻りつの繰り返しではあると思われる。本ケースの保護者についても、家庭生活の中で、本児への過剰な期待を取り除き、両親が自然と本児に合った対応ができることを目指したが、なかなか難しかったと思われる。

(2) 「子どもの発達勉強会」

ほとんどの保護者が就学後に担任からの指摘によって子どもの課題に気付いていることから、幼児期から問題が顕著であった子どもの保護者に比べると、団結して主体的な会を組織することは難しいと考えられた。したがって、

当初から担当者主導の会として発足することとなったが、発足後は保護者がよく協力してくれた。また、土曜日の開催であるが勤務体制とは別の活動としたため、きこえとことばの教室の6担任が有志で代わる代わる無理なく参加することができたと思われる。

三鷹市は平成8年度に5校から始まった「学習障害児等巡回相談」が、現在では市独自の事業として全小学校に拡大されていることや、小・中学校にスクールカウンセラーが配置されていること等から、比較的教職員が個別的な特別支援を要する児童に気付き、対処を工夫することが定着し始めている。そのような背景のもとで担任から相談を勧められ、保護者も「特別な」相談を受けてみよう、という気持ちになりやすいのではないかと考えられた。しかし、そのような過程を通して通級につながったとしても、児童の課題を告知され、向き合わなければならない保護者の動揺は大きく、その点、同じような課題や経験を持つ保護者同士が話し合うことで気持ちを支え合うことになったと考えられた。

【まとめ】

通常の学校に就学後、課題に気付く程度の、比較的軽い発達の課題を抱える児童および保護者に対する支援は、文部科学省の提案した通常の学級に在籍する6.3%の「特別支援教育」を必要とする児童および保護者への支援にも通じると考える。

参考文献

- ・ 読んで学べるADHDのペアレントトレーニング むすかしい子やさしい子育て シンシア・ウィットム著 上林靖子他訳 明石書店2002年
- ・ おとなのADHD 社会でしようびきいていくために デヴィッド・サンダース他著 田中誠監修 VOICE 2001年